恋する外道、狙うはゲーマー

気比音

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サンラクと鉛筆中心の話にしようと思っています。

初の長編二次創作なのでご理解よろしくお願いします。

目次

1話 …… 1
幕間～ある日の居酒屋～ …… 5
2話 …… 7
3話 …… 11
4話 …… 16

1話

３月某日
鉛筆騎士王：サンラク君来應受かったそうじゃん
サンラク：早すぎだろ
さっき結果出たばかりだぞ
オイカッツォ：サンラクも春から東京で一人暮らしか
鉛筆騎士王：一緒に住む？
サンラク：うちの妹を人殺しにするつもりか
オイカッツォ：どんな家庭なんだ
鉛筆騎士王：家探すのお姉さんが手伝ってあげようか
サンラク：いや、借りを作るとか後が怖すぎるんですけど
鉛筆騎士王：合格祝いだよ、けどまあこのアプリを入れることで貸し借りなしとしようじゃないか、カッツォ君もだよ
ｈｔｔｐｓ：／／ｐｌａｙ○○○○…
オイカッツォ：なんで俺まで
サンラク：カレンダー？
オイカッツォ：予定共有アプリじゃなかったっけ
鉛筆騎士王：大正解！週単位の設定もできるしこれを見れば他二人の予定がわかるから互いに会ったりオフ会もやりやすくなるでしょ
サンラク：まあいいか、了解

・・・・・・
４月の朝
なんでこいつがいるんだ
「…」
「お久しぶりです、ペンシルゴンさん」
「久しぶりだね、玲ちゃん
二人とも第一志望に受かるなんてすごいね、お姉さんビックリしたよ」
「あ、ありがとうございます」

「…」
「サンラク君ははなんでさっきから私をじっと見ているのかな
美しすぎて惚れちゃった？」
何言ってんだこのアホは
「目は口ほどに物を言うってホントだねー、ゲームだったらぶっ飛ばしてたところだよ」
「……」
「玲さんどうかした？」
「い、いえ大丈夫です」
ペンシルゴンのやつ汗かいてるけどそんなに暑いのか
むしろさっきから少し寒いくらいなんだけど「で、なにか言いたげだったのは？」
俺と玲さんは今日来應の入学式に来てるわけだが
「卒業式もそうだけどさ、普通お祝いの言葉言いに来るのって学校関係者だよな」
なんでそこで天音永遠が招かれるんだよ
「私も少し調べてみたんだけど、この学校の関係者って大体社長や有名な会社の幹部なんだよね」
立派なことじゃねえか
「そんな人達より天下のカリスマモデル様の方が新入生も喜ぶでしょ」
「立派に会社を支えてる人をそんな人呼ばわりするんじゃねーよ」
「確かにすごい歓声でしたね」
「若干1名怪訝な顔してたけどね」
「じゃあダメじゃねーか、ってかなんで見えてんだ」
「魔王舐めんじゃないよ」
「とりあえず式に呼ばれたのは百歩譲ってよしとしよう
でもさ、」
「なにか問題でも？」
「入学式終わったのって11時半だよな」
「そだね」

「俺達クラブの新入生勧誘してるの回ってきて現在時刻４時なんですが」
「ペンシルゴンさんずっといたんですか？」
「私は私で色々やることがあったのだよ」
　卒業生でもない人がこんな時期にやることなんてないと思うんだが
「それに、楽郎君まだ東京慣れてないでしょ
　晩御飯食べるお店までま案内してあげようかと思ってね」
　一体どこまでが本音なんだか
「あの、お二人はこの後ご飯いくんですか？」
「カッツォのやつもくるけどな」
「お供してもよろしいでしょうか」
「それがね、カッツォが大事な話あるから他に誰も呼ぶなって言ってね」
「そうなんですか」
「えっ、そんな話聞いてないけど」
「ついさっき連絡来てたよー」
　マジかよ、マジだった
「玲さん、また今度食べに行こっか」
「は、ヒャい」
　最近なかったかは久しぶりにバグったのを見た気がする
「サンラク君私にはお誘いないのかなー？」
「お前とは今から行くし予定あったらどうせそっちが呼び出してくるだろ」
「それもそうだ」
「互いの予定とか分かるんですか？」
「ほら、私ってば完璧超人だから」
「良心というものを知らない人が完璧なわけないだろーが」
「どころで、何も聞かずに歩いてるけど、玲ちゃん家の方向あってる？」
「この交差点を右です」

「じゃあ私達真っ直ぐだからお別れだね、ばいばーい」
「玲さん、また学校で」
「さ、さようなら」

幕間～ある日の居酒屋～

「笑いすぎですよトワ先輩！」
「あはははは、そんな話聞いたら誰でも笑っちゃうって…ぷっ、くくく…」
「今度こそはと思ってイベント全部調べたんですよ！それなのに…！
　店員さん、おかわり！」
「確かちょうど同じ日に征服人形の未確認タイプが見つかったとかだったか」
「モモちゃんもパーティー組んで探しに行ってたしね～」
「レベリングついでにティアプレーテンの少し向こうまで見に行っただけだ」
「ひぐっ、わざわざ、私のイベントの日に行かなくてもいいじゃないですか」
「いくら約５０種が３桁数ずついるとはいえプレイ人口よりは少ないからなー
　早いほうが有利なんだよねー」
「お前もあのユニーク殺しを除くと一番早くに契約してたしな」
「まあ、彼はほら、未知を引き寄せるっていう秋津茜ちゃんのリアルラック並みに稀有な体質だから」
「征服人形とか、人間ですらないじゃないですかー！」

・・・・・・

「エイトちゃん寝ちゃったね」
「永遠、お前の方は大丈夫なのか」
「私はプライベートでゲームやってるから」
「一度ファンにお前の本性を教えたほうがいい気もするが、そっちじゃない
　妹に聞いたぞ、二人とも東京に来るそうじゃないか」
「二人？あぁ、玲ちゃんもだもんね

大学のレベル低いわけじゃないのにすごいよね」
「そうやって余裕ぶってるが、あいつらは春からも同じ学校だぞ」
「私のほうが自分の魅せ方わかってるから」
「高校よりも自由になるからアプローチも増えるかもな」
「ほんと、ゲーマーになってくれたらよかったのになー」
「なぜならなかったんだ？あれだけのスキルがあればやっていけるだろ」
「ゲーマーがダメというよりも家の事情で趣味を謳歌するには大学を出る必要があるんだって」
「流石に家の事情に口出しはしないのか」
「やりすぎて評価さがるのは嫌だからね」
「素性を知りながらも付き合いが続いてるんだから簡単に下がることは無いだろ」
「知られてるからこそ裏がないか勘ぐられるんだよねー、一緒にバカやるのは楽しいからいいんだけどさ」
「むにゃ…トワ先輩、気になる人でもいるんですか？」
「八花、起きてたのか」
「Ｚｚｚ…」
「寝ぼけてるみたいだから夢だったことにしちゃおっか」
「そうやって誤魔化すのは結構だが、本人に対してはもう少し度直接的でないとあのタイプには意識されないのでは」
「そんだけアドバイスできるなら自分の恋愛に活かしたらいいのに」
「なら、私もあいつを狙ってみるか」
「それだけはやめてー！」

2話

「遅れてごめん、インタビューが長引いた」
　カッツォが現れたときには俺とペンシルゴンが店についてから2時間半が過ぎていた
「残念だったねカッツォ君、もうラストオーダーは過ぎちゃったよー」
「え、うそでしょ」
「お前が食べれるのはここにある野菜だけだな」
「危うく騙されかけたけどまだそんな遅くないしこの店食べ放題みたいな時間制限もないよね」
「で、今度はなんの話があるのかな？」
「誰も呼ぶなってことは顔隠し、名前隠しのことだろ」
「まあね、まずサンラクもとい顔隠しに対してなんだけど、今回はいつもとは少し違うくてね」
　なんでも大学生になった俺に対してある程度は譲歩してくれるらしい
「なんで俺が大学生になったって知ってんだ？」
「サンラク君、ダイナスカルの猛禽と戦った時にいろいろ叫んでたの覚えてない？
　さらに体格を考慮すると高校生あるいは成長の早い中学生ではないかってネットでも推測されてたよ」
　受験生が11月なんかにテレビに出てくれるわけないから1番早くても進学は今年ってことになるのか
「そのおかげで先月から挑戦状やらがさらに増えたってわけ」
「代わりにカッツォの女装集出すから我慢してくれねーかな」
「やらないよ、君そんな写真持ってないでしょ」
「そこはほら、私が頑張ってコネでなんとかするから」
　あっ、目が死んだ
「それにアメリカ以外からも話がきてるんだよ」
「とりあえず譲歩の部分言ってくれないと話が進まないぞ」
「ああ、それは…」

・大学生生活に支障をきたさないように仕事は基本月２回多くても週１回まで
・ＪＧＥのようなイベントの司会はしないなど多少なら仕事を選ぶこともできる
簡単に言うとこういうことらしい
「要するに、爆薬分隊でバイトしてみませんかってことだね
正式にやるかどうかは大学卒業時に決めていいらしい」
バイトでゲーマーってありなのか？瑠美もバイトで読モやってるけどあいつは下手したらそのまま職に就きそうだからな
ｅスポーツがメジャー化して随分経つけどスポーツ選手のバイトなんかも聞いたことないし
「なんでも特例らしいよ、給料も反響次第やし俺らほどではないけどそれでも月単位でみると他のバイトよりいいらしい」
「随分と顔隠しに期待しているんだねー」
「トッププクラスのプロゲーマーとやりあえる可能性があるからね」
「そうだぞ、敬い給えよ」
「残念ながら私は可能性があるのではなく既にトッププモデルなので」
「それにサンラクどうでもいいところで勝負落としそうだし」
「落とすぐらいならあげんなよ」
「返事は今月中だって」
「カッツォ君、私には何かないの？」
「既に仕事持ってるくせにがめついなー、まあ話は来てたけどさ」
「えっ」
名前隠しを電波に乗せようとしたらいろいろ問題がありそうだが、ＧＨ：Ｃにおいて街を存分に使った立ち回り自体は高評価だったらしく、シュミレーションゲームのテスターになってもらってはという案が出たらしい
「天音永遠はプライベートでいろんなゲームをやってるって明言してたから正体を知ってる上層部もあっさりオッケーだしたそうだよ」
仕事内容としてはゲームして感想送るだけだとか
しかも、やらなくても給料支払われないだけで罰金はないとか

「気をつける点としては、他言無用はもちろんとして、ゲームができるのはテスト期間中だけであり最終調整後発売された場合は買わないとできないよってことぐらいかな」
「へぇー面白そうじゃん、その仕事受けてあげようじゃないか」
「そう伝えておくよ、話変わるけどさ」
「「どうかした？」」
「俺の目の前に並べられたこれは何？」
「根菜スティックだけど？」
「サンラク君はいつぞやの打ち上げで根菜責めされたのを根に持ってるらしくて」
「だったらペンシルゴンも一緒にたべるべきでしょ」
「遠慮しとくよ」
「栄養満点だぞ」
「ヤク漬け暴徒と違って私は常に健康体だから」
「ライオッドブラッドは合法だ！」

・・・・・・

「この食事が経費で落ちたりはしないのかー」
「そもそもサンラクは保留中だし君の仕事だってウチが仲介しているだけだからね」
「しかも別に仕事上必須の食事会ってわけでもないしな」
「サンラク君、大人の世界ではどんな理由をつけてでも貰えるものは貰っておくべきだよ」
「じゃあバレンタインのチョコはちゃんと全部頂いてるのか？」
「…選別してる」
「サンラク、そのことに触れるのはよくないよ」
「ってかサンラク君バイトのこと保留にしてたけどどうせ承諾するんでしょ
　どれだけひどいか来年の2月にはわかるよ」
「覚悟しといたほうがいいと思うよ」

「そんなになのか…」

・・・・・・

「それじゃ俺はここで、早いうちに連絡してくれサンラク」
「了解、またな」
「またねー」

「それじゃ、私達も帰ろっか」
「まさか家探しで紹介されたところの近くにペンシルゴンの家があったとはな」
「ふふふ、驚いたでしょ」
「何が目的なんだか」
「いやー、サンラク君が暇な時にでも呼び出して賞味期限ギリギリのもので料理でもしてもらおうかなーと思ってね」
「お前が何を考えてるのか時々わからなくなるのが怖いな」
「ふふふ」
「急にどうした」
「調子に乗って少し飲みすぎたみたいでね、しばらく腕に捕まらせて」
「それぐらいならいいけど酒もほどほどにしとけよ」
「それじゃ、我が家に向かってレッツゴー！」

3話

鉛筆騎士王：サンラク君今日の予定は？
サンラク：終日埋まっております
鉛筆騎士王：一緒に運動しに行こー
サンラク：今の俺の返答に対してその言葉はおかしくないか？
鉛筆騎士王：どうせ1日中クソゲーするんでしょ
サンラク：なぜバレたし
鉛筆騎士王：玲ちゃんに聞いたら授業は来週からだって言ってたし君趣味の時間減るからって部活入らなそうだし
鉛筆騎士王：そもそも私たちアプリで予定共有してるじゃん
サンラク：そういえばそうだった
サンラク：だったら最初から聞くなよ
鉛筆騎士王：というわけで2時間後に迎えに行くから準備して待っていてね

というやり取りがあったのが今朝であり、いまは何をしているかと言うと
「シャワーありがとねー」
「おいペンシルゴン」
「永遠って呼んでよ楽郎君
２人だから身バレする心配ないしＰＮじゃよそよそしい感じするじゃん」
「拒否権は？」
「無いよー」
「で、今度はなんのつもりだ永遠」
「いやー、運動して汗かいたんだからシャワー浴びたくなるでしょ」
「俺んちじゃなくていいだろ」
「まぁまぁそんなこと言わずにさ、夕方にまた一緒に運動しに行くんだから」
「あれで終わりじゃねーのかよ、今からは何するんだ？」

「何しよっかなー、ところでそれ何見てるの？」
「ほらよ」
　永遠に見ていたページのまま渡す
「巡礼イベント？」
「聖女生誕祭の他にもイベントを開催しろと多数のプレイヤーが運営に訴えた結果来月の長期連休にやることになったんだとよ」
「これすごいね、期間限定とはいえ参加者全員インベントリア使えるなら参加だけして狩りに没頭することも可能じゃん」
「報酬アイテムが豪華だからそっちを狙う人の方が多いと思うぞ」
「確かに大盤振る舞いだね」
「一緒に参加しないか永遠」
「へ？」
「このイベントペアじゃないと駄目だから組まないか」
「そ、それは構わないけど、どうして急に？」
「まだ仮説ではあるがちょっとした作戦を思いついたんだよ」
「なんだそういうことか」
「そういうことって？」
「なんでもないよ、その作戦は？」
「それは参加登録してからのお楽しみってことで」
「じゃあ今からしにいこー、一旦家に帰るからログインして登録所で待っといてー」
・・・・・・
「サンラクくぅん…イベント一緒に参加しようぜぇ…」
「げっなぜここにいる」
「君が来るのをずっと待ってたんだよぅ」
「サンラク君、イベント私と一緒にやりませんか」
「後から来て横取りはいけないと思うなぁ…彼は僕と組むんだからぁ…」
「あなたに対して嫌そうな顔してたじゃないですか、サンラク君とは私が組みます」
　なんかめんどくさいことになったな

逃げたいとこだがここでペンシルゴンと待ち合わせしてるしな
「サンラク君、私と組みますよね」
「サンラクくぅん…僕とやるよねぇ…」
「あー、そうだな…」
「なんか面白いことになってるねー、私はお邪魔だったかな？」
「ナイスタイミング、鉛筆大魔王の力でどうにかしてくれ」
「姫のご命令とあらば、ってか私名前的に魔王じゃなくて騎士王なんだけどぉー」
「それを言うなら俺も男だから姫じゃねーよ」
「いや、今のサンラク君女だし」
そういえばこの前聖杯使ってそのまま死なずに終わってたな
「僕がサンラクくぅんと組むからぁ…『最大火力』様は彼女と組めばいいじゃないいぃ…」
「あなたが実現杖でペンシルゴンさんをサポートする方が相性いいじゃないですか」
「君たち二人で譲り合ってるけど私サンラク君と組むからお二人とは無理だよ」
「「は？」」
「おー、見事にハモったねー」
「サンラク君どういことですか、っあれ？」
「消えたぁ…？」
「よくやったペンシルゴン、登録は済ませたぞ」
「ちょっと、去るならこの二人をどうにかしてからにしてよー」
俺はできる男なのでペンシルゴンが気を引いてくれてるうちに登録を済ませたのだ
後はペンシルゴンに囮に逃げるだけ
ペンシルゴンからの報復は1時間後の俺に着払いで発送

・・・・・・

撤退から1時間後、家まで押しかけてきた永遠が運動後に要求した

のは
「楽しみだね楽郎君の料理」
「修羅場に私1人を放置するからだよ」
「カッツォでも同じことをしただろうよ」
「あ、時々食べに来るからいくつかバリエーション考えといてね」
「次から請求してやろうかな」
「材料費は私が出すんだし食費浮くんだから十分でしょー」
「家の前に誰かいる」
「あ、玲ちゃんだ、おーい」
「ペンシルゴンさん?!」
「玲さん、どうかしたの?」
「あの、用というかなんというか
一応行ってもいいか連絡入れたんですが」
「返事来る前に来ちゃったんだ
楽郎君スマホは?」
「あー、走るだけのつもりだったから家の中だ、玲さん返事できなくてごめんね」
「いえ、大丈夫です」
「せっかくだし夕御飯食べていきなよ」
「よかったねー、多めに買っといて」
「料理すんのが1人分増えたから永遠も手伝え」
「えー、なんでよー」
「……2人は下の名前で呼び合ってるんですか?」
「それは玲ちゃんもでしょ?」
「…そうですね」
「2人ともさっさと入ってきなよ」
「はーい」
「なんの話してたんだ?」
「ふふふ、内緒だよー」
「楽郎君、私も準備手伝います」
「ありがとう、それじゃお皿出して永遠を見張っといて」

「わかりました」
「見張りってなんなのさ」
「油断するとすぐなにかするからなお前は」「もう少し信用してくれてもいいと思うなー」

4話

ルスト：サンラク、なぜネフホロのイベントに来ない
サンラク：シャンフロと被ってたからなー
ルスト：ネフホロを優先すべき
サンラク：どんなイベントだったんだ？
モルド：いくつかのグループに分かれて死んだら負けのバトルロワイヤルを3セット
サンラク：結果は？
モルド：ルストが無双
鉛筆騎士王：ルストちゃんは相変わらずだねー
鉛筆騎士王：他の皆は順位どうだったのかなー？
秋津茜：3位でした！
サンラク：すごっ
鉛筆騎士王：ペアは？
サイガ—0：私です
鉛筆騎士王：さすがだねー
鉛筆騎士王：京極ちゃんはどうだったの？
京極：カッツォと組んだんだけど
サンラク：えっ
京極：え？
鉛筆騎士王：カッツォ君ペッパーカルダモンちゃんはどうしたの？
オイカッツォ：彼女リアルが忙しいって
サンラク：カッツォが仕事放り出すからだ
鉛筆騎士王：からだー
秋津茜：からだー
ルスト：秋津茜ステイ
モルド：話がややこしくなってる
オイカッツォ：そんなことより
鉛筆騎士王：そんなことで片付けちゃったよ
サンラク：ペッパー氏かわいそうに

オイカッツォ：そこの外道二人組！
サンラク：？
鉛筆騎士王：？
オイカッツォ：最終日のあれはどういうことだ！
サンラク：最終日？
京極：ファスティアとセカンディルの間に特大落とし穴ができてて身動きが取れなかったんだよ
鉛筆騎士王：どうやらディープスローターちゃんうまくやったみたいだねー
サイガ―０：何やったんですか？
鉛筆騎士王：実現杖で穴を作ってもらったんだよ
サンラク：あれをか、マジかよ
鉛筆騎士王：それもラストスパートで人が簡単なところに集まるタイミングで
モルド：なんの躊躇いもなくむごいことを
ルスト……悪魔
サンラク：で、カッツォペアは見事にハマったと
サンラク：ザマァ
オイカッツォ：サイガ―１００もハマってブチギレてたよ
鉛筆騎士王：ひぇっ
京極：サンラク達は何位だったのさ
サンラク：聞いて驚くなかれ
鉛筆騎士王：２位だよ
サンラク：今俺が言う流れだっただろ
鉛筆騎士王：早いもんがちさ
秋津茜：すごいですね！
サイガ―０：どういう作戦だったんですか？
オイカッツォ：どうせ他人を陥れる作戦だったんでしょ
鉛筆騎士王：ノンノンノン、三徹しただけだよ
サンラク：俺達のペアはな
京極：マジ？

サンラク：最大速度舐めんな
サイガ―０：でもそれでも2位なんですね
オイカッツォ：ちょっと待って
オイカッツォ：「俺達のペアは」って言った？
ルスト：他にも策があると予想
サンラク：ふっふっふっ
鉛筆騎士王：サイナちゃんとニーナちゃんはもっとすごいんで

・・・・・・・・

～イベント告知直後～

「このイベントで効率よく順位を上げる方法ってなんだと思う？」
「プレイ時間増やす以外でだよね？」
「もちろん」
「常にゲーム内にいるＮＰＣと組むとか」
「シャンフロはリアルに作ってあるからＮＰＣも寝ないといけないし、報酬に興味ないＮＰＣを駆出すと好感度は確実に下がるだろうな」
「じゃあどうすんのよ」
「だったら確実に報酬に興味があって寝なくても動けるＮＰＣを使えばいい
今回の最上位入賞者の報酬は？」
「もしかして征服人形と組むってこと？」
「正解」
「でもそれならサンラク君にはサイナちゃんがいるから一人でできるじゃない」
「それだと一人分しか効率上がらんだろ
サイナとニーナを組ませるんだよ」
「私達は？」
「サイナたちがほぼ確実に入賞してくれるから俺達は自力でもう一つ狙いに行く」
そうすればサイナの武器が確実に１つ増えるし上手くいけばもう

一つ増やせるからな

・・・・

京極：ＮＰＣと組むことは考えたけどＮＰＣ同士もありなんだ

鉛筆騎士王：ペアのどちらかがプレイヤーでなければならないなんてルールないからねー

サイガ―０：征服人形って参加できたんですね

鉛筆騎士王：：参加資格を持つのは〈人形の知的生命体〉でありサンラク：征服人形が一つの種族であることはベヒーモスで確認済みなんだよなー

京極：征服人形って死ぬことあるの？

サンラク：粉々になったら死ぬらしい

オイカッツォ：よくそんなのを単独行動させられたね

鉛筆騎士王：ベヒーモスとリヴァイアサンで強化しまくってさらに規格外戦術機も使ったからねー

サンラク：旧大陸中盤までは余裕でソロ攻略できるんだよなー

オイカッツォ：リアクターは俺が持ってるはずなのに青龍と朱雀が無かったのはそーゆーことか

鉛筆騎士王：：さあワンツーフィニッシュを決めた私達にひざまずくがよい

オイカッツォ：落とし穴の主犯としてサイガ―１００にチクってやる

鉛筆騎士王：ちょっとぉ?!

サンラク：調子に乗って手痛いカウンター食らってやがる

オイカッツォ：他人事のようにしてるけど君のとこにはアージェンアウルを送り込むからね

サンラク：おいコラやめろ

鉛筆騎士王：ルールの盲点をついた畜生はサンラク君だよ！私は汚染された側だよ！

サンラク：意気揚々と国を乗っ取るお前にだけは言われたくねーよ

鉛筆騎士王：国家転覆は全人類の夢でしょぉー